

学校保健

後藤美由紀・伊藤友美子

I はじめに

本年度より、東雲小学校・東雲中学校では、『グローバル時代をきりひらく資質・能力』を培う教育の創造」を研究テーマに設定し実践研究を始めることになった。本研究における「グローバル時代をきりひらく資質・能力」は、「さまざまな文化や価値観を理解し認め合いながら自分の考えを明確にして問題を解決する力」と本校では定義している。

昨年度までは自己意識に着目し、小学校では自己理解を促すとともにアサーティブなコミュニケーションスキルを学ぶ授業を行った結果、当該授業は自己受容をしたりコミュニケーション傾向に気づいたりする場となった。中学校では生徒の自意識に着目し、負傷頻度との関連を調査した結果、負傷回数の多い生徒の方が自己の内面への関心が低い傾向にあることが分かった。

今年度からは自己意識と併せて、他者とのかかわりという視点も加え研究を進めていくことにした。なぜなら、他者とのかかわり、つまりコミュニケーションは様々な能力育成や学習活動の土台となると考えられるからである。文部科学省におけるコミュニケーション教育推進会議（2011年）では、コミュニケーション能力が求められる社会背景として「21世紀はグローバル化が一層進む時代であり、このような時代を生きる子どもたちは積極的な「開かれた個」（自己を確立しつつ、他者を受容し、多様な価値観を持つ人々とともに思考し、協力・協働しながら課題を解決し、新たな価値を生み出しながら社会に貢献できることができる個人）であることが求められている。」として社会の要請について触れられている。

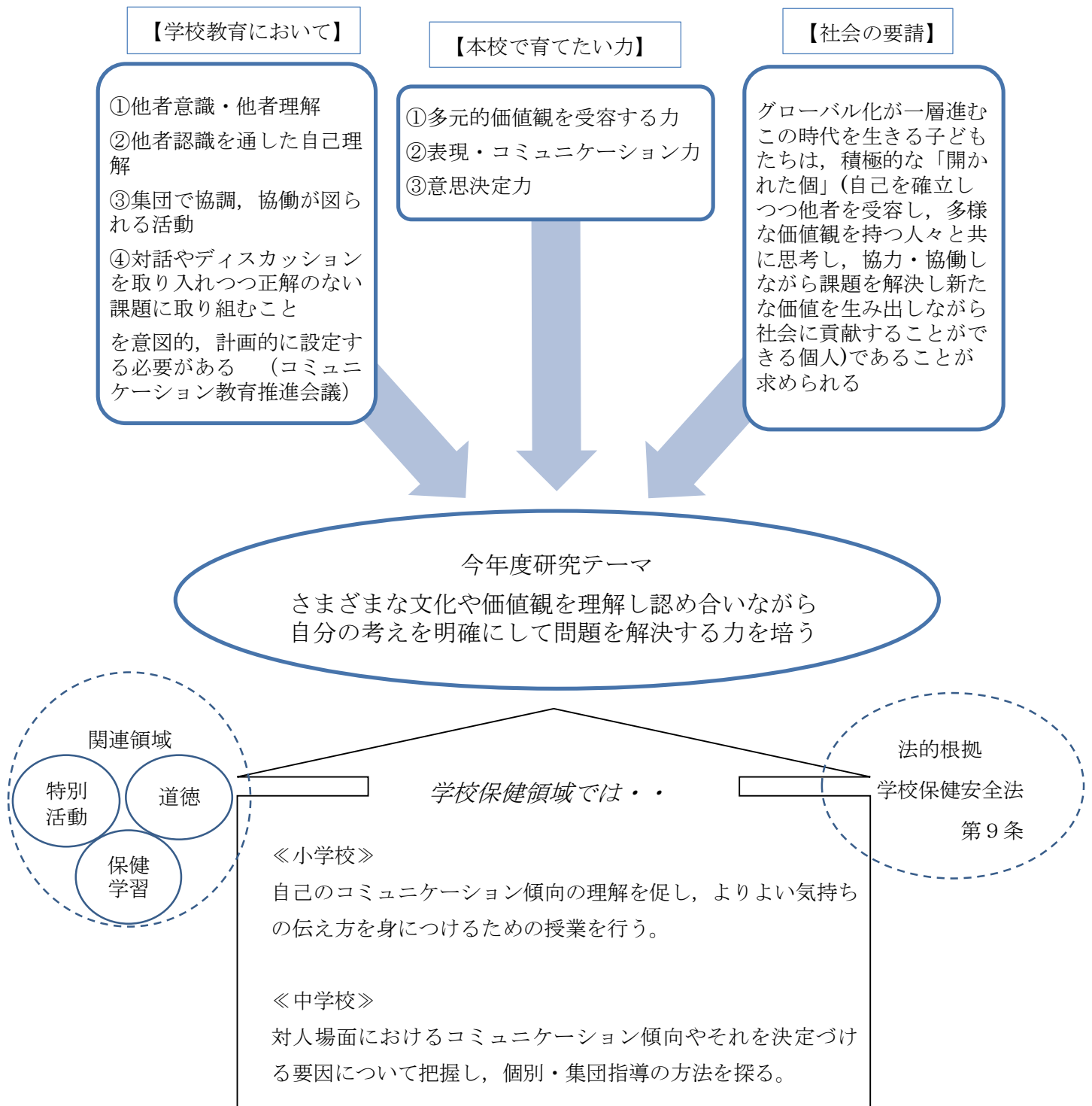
また、コミュニケーション能力を学校教育において育むためには「①自分とは異なる他者を認識し、理解すること②他者認識を通して自己の存在を見つめ、思考すること③集団を形成し、他者との協調、協働が図られる活動を行うこと④対話やディスカッション、身体表現等を活動に取り入れつつ正解のない課題に取り組むこと、などの要素で構成された機会や活動の場を意図的、計画的に設定する必要がある。」とも述べている。

「グローバル時代」という社会情勢、また文部科学省をはじめ学校教育のさまざまな場で求められる、今年度の本校研究テーマとして掲げている資質・能力を培う教育活動を支える基盤形成のため、学校保健領域では児童生徒のコミュニケーションの実態を踏まえてアプローチしようと考え、図1のように本年度の研究テーマと学校保健領域を関連付けて以下のような研究を進めることにした。

小学校では中1ギャップの解消を念頭に置き、5年生・6年生を対象に、コミュニケーション能力の土台となるアサーティブなコミュニケーション活動への変容を狙った授業を行うことにした。

また、中学校では生徒のコミュニケーション傾向やそれを決定づける要因について把握し、今後の集団および個別の保健指導に役立てるため、学業における自己効力感とコミュニケーション傾向との関連について質問紙調査を行うことにした。

図1 本年度研究テーマと学校保健領域の関わり



II 本年度の研究計画

1 研究の目的

「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育成する授業の基盤となる集団内でのコミュニケーション傾向を探る。

2 研究の方法

- (1) 質問紙調査を行って、児童生徒のコミュニケーション傾向を把握する。(小・中)
- (2) 自己理解を促し、コミュニケーションスキルについての授業を行って、その前後のコミュニケーション傾向の変容を探る。(小)

3 研究会当日の授業

小学校5年

「気持ちを言葉にのせて伝えよう」

《引用・参考文献》

文部科学省コミュニケーション教育推進会議, 「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために」(審議経過報告), 2011.